Life

～鳥取の“風の人”にきいてみた～

【指導教員】　川井田祥子　　木野　彩子

【学　　生】　明石健太郎　　乾　　眞子　　景山　真奈　　川上　柾尚　　川口　梨音
川本　愛莉　　小池京多朗　　徳田　菜央　　中村　花菜　　福岡　　舞
宮本　岳昇　　盛田　実優　　渡邉　乃愛

1．はじめに

私たち、まちづくり班は「Life～鳥取の〝風の人〟にきいてみた～」と題して、鳥取に県外から移住してきた方たちへのインタビュー調査などを行った。調査の目的は、移住者の方々が鳥取で暮らす上での工夫と楽しみ、地域との関わり方を知ることであり、特に一人ひとりの暮らし方、移住者の方々の地域に対する考え方に観点を置いて調査を進めた。

まず、まちづくり班の１年間の歩みを紹介しよう。主な活動として、文献調査、移住者へのインタビュー調査、そしてインタビュー調査の対象者の中から、森のようちえん「風りんりん」の代表取締役である徳本敦子さんと副代表取締役の河上啓子さん、さらにグラフィックデザイナーの中村恭子さんへの追加インタビューを行った。

最初に行った文献調査では、岸政彦・石岡丈昇・丸山里美『質的社会調査の方法：他者の合理性の理解社会学』（2016、有斐閣）、山崎亮『ふるさとを元気にする仕事』（2015、ちくまプリマー新書）、田中輝美・法政大学社会学部メディア社会学科藤代裕之研究室『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』（2015、ハーベスト出版）の３冊を輪読し、その後の調査に必要となる知識を身につけた。

インタビュー調査では、ウェブサイトなどを活用して、インタビューしたい移住者の方々をピックアップした。そして、ピックアップした移住者７名への依頼状を作成して郵送し、インタビューを承諾していただいた方から順に電話やメールなどで訪問の日程調整を行った。インタビュー調査は３～４人の学生が１グループとなって訪問し、直接お話を伺ったのち、お話の内容を録音したものをそれぞれ文章化し、まちづくり班全体で内容を共有した。また、これらの活動の期間中に、汽水空港という本屋を営む森哲也さんを大学に招いて、まちづくり班全員でのインタビューを行った。

インタビュー調査は当初、移住者のお話から鳥取の魅力を探るためのものだったが、実際にお会いした移住者の多くは、鳥取への移住に積極的ではなかったため、個々のお話から鳥取の魅力を見つけることは困難だった。そこで私たちは、移住者たちはなぜ鳥取に来たのか、現在の生活はどうなのかと、調査の観点を再検討して一人ひとりの暮らしに着目した。そして、最初のインタビューで特に興味をもった徳本敦子さんと河上啓子さん、中村恭子さんに再度のインタビューを行った。

徳本敦子さんは神奈川県出身、パートナーの「農業をしたい」という希望によって、当時住んでいた東京から鳥取へ移住した。そして、のちほど４節で詳述するように、たまたま見学に行った智頭町の「森のようちえんまるたんぼう」に魅せられ、鳥取市内に自ら2014年４月に「森のようちえん・風りんりん」を開設した。河上啓子さんは鳥取生まれ鳥取育ちで、徳本さんに誘われて、風りんりんのスタッフとなった。２人の地域との関わり方から、文献調査で学んだ「風の人」と「土の人」によるまちづくりの構造を発見することができた。

中村恭子さんは鳥取県琴浦町出身で、大学進学時に東京へ移住するも、再び鳥取に戻り、その後にもう一度、東京と鳥取への移住を繰り返した、いわゆるWターンの経験者である。グラフィックデザイナーとして活動する中村さんは、文献に示されている「風の人」「土の人」のどちらかに明確に分類されるわけではないが、独自のスタイルでまちづくりに関わっていることが明らかになった。

このように、文献調査からスタートし、移住者の方々へのインタビューを続けた結果、移住者の方々の鳥取での暮らし方、地域との関わり方を知ることができた。次節以降、それぞれの内容をより詳しく紹介する。

2．文献調査

私たちはインタビュー調査に先立って、事前に以下の３冊を輪読し、移住の現状や調査方法に関する理解を深めた。

2−1．岸政彦・石岡丈昇・丸山里美『質的社会調査の方法：他者の合理性の理解社会学』（2016、有斐閣）

本書は、質的調査の種類や方法が詳細に記されている。研究者が行う調査は一般的に、質的調査と量的調査の２つに大きく分けることができる。

まず、質的調査の方法として挙げられているのは、ある地域や集団を対象とした総合的な実態調査を行う「フィールドワーク」、ある特定の集団や地域に入り込み生活や仕事をともにしながら会話ややり取りを記録する「参与観察」、個人の人生の物語に沿って社会的なことを考察する「生活史法」である。一方の量的調査の方法としては、調査の目的にふさわしい規模の数を集めて割合や相関関係を知るという〝数字〟を使う調査法であり、一般的にわかりやすい

例として「アンケート」が挙げられていた。

これら２つの調査方法には、それぞれ利点と欠点がある。たとえば量的調査は比較が前提となっているのに対し、質的調査は比較のための条件をそろえることが非常に困難であるため、他の事例との比較がむずかしい。質的調査は個々のケースに対する理解や解釈につながり、量的調査では個々のケースを浅く理解することしかできない。このような２つの調査の利点と欠点を理解したうえで、私たちはインタビュー調査を行っていくことができた。この本を読むことによって、何を目的に調査するのか、適切な調査方法をどのように選べばいいのか、また、調査する際に相手の立場に立って理解していくことが必要だと感じた。

２−２．山崎亮『ふるさとを元気にする仕事』（2015、ちくまプリマー新書）

本書は、コミュニティデザイナーの山崎亮さんによって書かれた「コミュニティデザイン」についての入門書である。ふるさとの価値とふるさとを元気にする働き方や考え方についてまとめられている。

まず、コミュニティデザインとは一見、建築や統計を思い浮かべる人もいるかもしれないが、そうではなく、どうすればまちが元気になるか、まちを元気にする手法をその地域の住民と一緒に考えることである。つまり、モノではなく人とのつながりそのものを創る役割がコミュニティデザイナーとなる。若い世代を中心に人とのつながりを迷惑に感じる人も多い中、山崎さんが地域やコミュニティを重視するのには理由がある。ひとつは、地震や洪水といった災害の影響だ。東日本大震災をはじめとする災害時においては、地域住民同士の結束が復興に向けての活力となり、互いの心のよりどころになったことからもその重要性が改めて認識された。また、都市での生活に窮屈さを感じる人々や、地方での人のつながりや自然とのふれあいに魅力を感じる人々が現れ、「ふるさと」地域での生活に価値を見出している人も多くいる。このように、いわゆる「ふるさと」地域やコミュニティに注目が集まっているのに加えて、山崎さんは仕事を金銭だけで評価されない働き方に目を向けることによって、ふるさとに価値を見出せるようになるという。具体的には「ふるさと」での仕事を、地域住民との関わりを楽しむ場や自らの学びの場として評価していくことで、労働に対するモチベーションを上げ、理想の生活に近づけられるとしている。さらに、ふるさとの価値を生かすために大切なのは、「風の人」「土の人」という２種類の担い手の存在であると山崎さんは述べている。

２−３．田中輝美・法政大学社会学部メディア社会学科藤代裕之研究室『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』（2015、ハーベスト出版）

本書は、ローカルジャーナリストの田中輝美さんと、法政大学社会学部メディア社会学科准教授の藤代裕之さんと、その研究室所属の学生たちによって書かれた。９人の学生が行った８人の「風の人」へのインタビューも掲載されている。

「風の人」とは、地域の外からやって来て地域に新しい考え方や視点をもたらす人々のことをいう。同時に、地域には「土の人」も存在する。土の人とはその地域に根づいて活動を受け継いでいく人々のことをいう。これからの地域をより活性化させていくためには、この両者が必要なのである。地域に根づいている土の人では気づかないこと（つまり活動や魅力）があり、それを外からの視点をもつ風の人は見出だすことができるため、風の人と土の人とのつながりをもたせることが大切なのである。

3．移住者へのインタビュー調査

3−1．森哲也さん：6月14日、鳥取大学にてインタビュー

森哲也さんは鳥取県東伯郡湯梨浜町松崎で「汽水空港」という本屋を経営されており、新刊本や古本を売るだけではなくワークショップやトークイベントなどの多種多様な活動をしている。扱っている本は一般の書店で流通している書籍だけではなく、地域住民など一般の人々が作ったZINE（ジン）と呼ばれる冊子も販売しており、自分の考えを表現する場になっている。こうした幅広い活動は森さんが名づけた店名「汽水空港」に由来している。「汽水」とは海水と淡水とが交じり合った水を意味し、店の近くにある東郷湖も「汽水湖」となっている。また森さんにとっての「空港」とは、さまざまな背景をもった人々が訪れる場所であり、国籍など関係なく誰がいてもいい場所である。そこから、多様な人々が交じり合って居られる場所にしようと「汽水空港」と名づけた。

森さんは北九州で生まれ、10歳まで北九州で育ったが、親の仕事の都合によりインドネシアのジャカルタで10歳から12歳のときまで過ごした。そこではランドセルや制服など日本の学校では〝当たり前〟となっているものがなかった。さらに同世代の子どもたちは学校へ通わず、自ら商売をして生計を立てている光景を目の当たりにした。12歳からは日本に戻り千葉県で暮らしていたが、ルールの厳しさなどジャカルタとのギャップを感じ、社会へ出ることに対して漠然とした不安を抱いていた。その頃から図書館へ通って本を読むようになり、本の中の世界では自分と同じような不安を抱えながらも前向きに生きようとする人がいることを知って心が軽くなった。大学生のとき、東京・下北沢の「気流舎」という本屋でレイモンド・マンゴー著『就職しないで生きるには』という本に出合う。そこには本屋を営む主人公が、自分で自分の道や人生を切り拓いていく様子が描かれており、本屋の魅力に気づかされたという。自分にとっての学校は本屋であるということも再認識し、大学卒業後は本屋を開店したいと考えるようになった。しかしながら、すぐに実現できる資金や場所もなく、1年間は埼玉県の農業学校で研修を受けることにした。理由は、本屋をオープンしたとしても、本を売るだけで生計を立てるのはむずかしいだろうと考えてのことだという。そして農業学校を出た後は「さまざまな人に出会って取材し、記事を書きながらいろいろなところ訪ね歩き、行き着いたところで本屋をやろう」と考えて実行に移し、愛知や京都、そして鳥取にたどり着いた。

汽水空港の外観（汽水空港ホームページより）

汽水空港の店内（汽水空港ホームページより）

縁あって湯梨浜町で本屋をオープンすることを決め、知人の大工や左官職人などから技術を学び、何もない状態から自分の手で店舗を建てていった。

本からさまざまなことを学んだ森さんは、鳥取は田舎で人が少ないからとあきらめるのではなく、行動していく中で可能性を見出し、新しい何かが生まれるのを楽しみにしている人であった。

3−2．今井康誠さん：6月12日、ドッグカフェもふもふ（鳥取県境港市）にてインタビュー

今井さんは、境港市で唯一のドッグカフェである「ドッグカフェもふもふ」のオーナーで、店長とスタッフとともに店を運営されている。このドッグカフェは、自宅で犬を飼えない人が店の看板犬と遊ぶためだけでなく、飼い犬をここで遊ばせたいという人も来店できる。他のドッグカフェや猫カフェなどとは違い、時間制限で料金が決まっているわけではなく、時間は無制限で自由

に出入りすることも可能である。

今井さんは鳥取に移住する前、大阪の化学工場で約９年間働いておられた。その頃から現在の店長と知り合いで、店長が鳥取県西部に住んでいたこともあって、今井さんはしばしば鳥取県西部や島根県をよく訪れていたそうだ。そして、愛犬家であった今井さんは犬と一緒に入店できる店がほとんどないことに気づき、犬と一緒に入れる喫茶店を自らつくることを考えた。

そうしてつくったドッグカフェで今井さんが実現させたいのは、お客様同士や店員とが気楽に会話できる居心地のいい空間だが、お客様は必ずしも積極的に話しかける人ばかりではないため、今井さんが理想とする空間にはまだなっていないという。しかしながら、この地域の人々は他人にやさしい人が多く、知り合いではなくても自分のことのように助ける人も多いので、時間をかけてゆっくり理想の店にしていきたいとおっしゃっていた。今井さんはこのドッグカフェによって、多くの新たな人々の「つながり」を生み出すことのできる空間を地域にもたらしていると言えるだろう。

3−3．今家邦雄さん・美恵子さん：７月14日、えばこGOHAN（鳥取市河原町）にてインタビュー

今家さんご夫婦は現在、鳥取市河原町にてカフェ「えばこGOHAN」を経営されている。鳥取県に移住する前は大阪府の高槻市で焼鳥屋を経営されていた。もともと田舎暮らしをしたいと考えていたところ、娘さんが鳥取県に移住されたため、孫の相手をしたいという思いもあり鳥取県への移住を決断された。

飲食業を営む上でいちばん大切なのはコミュニケーションであると今家さんは感じているらしく、そのためお店に置いているテーブルも写真のようなロングテーブルにしてお客様同士の会話を促したり、食事をして終わりではなく、その後も話をするようにしている。すると会話の流れで共通の知人のいることがわかるなど、さらなるつながりが生まれる。今家さんは大阪の焼鳥屋時代から店にアーティストを招いてライブをすることがたびたびあり、それは現在の「えばこGOHAN」でも続いている。当時からの交流を活かして、大阪からもアーティストやお客様が来てくれたり、世界的に活躍するピアニストも演奏しに来たりする。店内だけでなく、大きな会場を借りてライブ企画を行うこともあるそうだ。私たちのインタビューのあとに打ち合わせを控えていた写真家は、イースター島や南極へ撮影旅行に出かけているとのことだった。アクティブな人にはアクティブな人とつながる力があることを感じた。また今家さんは、いなば西郷むらづくり協議会からの依頼で地域のマップを描いたこともあるという。そのマップにはたくさんの麒麟獅子や窯元が描かれており、地域の魅力が詰まっていた。

最後に、「えばこGOHANの名前の由来は何ですか？」と質問すると「私たちの暮らしの中の、いろいろなワンシーンの絵を詰め込んだ箱。絵の箱っていう意味」との答えが返ってきた。

3−4．喜瀬雅彦さん：９月13日、Beach　Cafe　& Outdoor　〝ALOHA〟（鳥取県岩美町）にてインタビュー

喜瀬さんは現在、岩美町にてカフェと民宿の「Beach Café & Outdoor 〝ALOHA〟」を経営されている。鳥取に移住する前は岡山県倉敷市でサラリーマンをされていた。大学生の頃からサーフィンをしにたびたび鳥取県を訪れ、約20年間にわたって岩美の海でサーフィンをしてきた喜瀬さんだが、ついに13年前、岩美町へ移住された。今回のインタビューでは、喜瀬さんが生きる上で大切にして

いることやアドバイスを伺うことができた。

岩美に移住してからカフェを始めるまでの８年間は、地域になじめず苦労もあったそうだ。仕事をしながら空いている時間に、廃墟になっていた管制塔を借りて改装し、１年半かけて現在のカフェ「ALOHA」を作り上げた。すべて手作りのためにかかった費用は莫大だったが、「『お金がないから何もできない』ではなく『これがやりたいからいくらでも借金して始める』ことをしなければ夢は叶えられない」とおっしゃっていた。

喜瀬さんは毎年浜辺でビーチフェスタを行っている。その中の企画のひとつに、子どもたちの思い出作りのために岩美の小中学生が描いたTシャツを飾るイベントがある。これも最初の頃はなかなか理解されなかったが、今では学校側からお願いされるほど、愛されているイベントになった。

大変なことはたくさんあるが、悪口も弱音も口にしないことが喜瀬さんのモットーである。「自分の好きなことをするためには、文句を言わずに一生懸命、スーパーポジティブでいることがいちばん楽しい」と生きていく上で大切にしていることを教えていただいた。

3−5．岩佐正敏さん：７月４日、一心庵（鳥取県鹿野町）にてインタビュー

鹿野町でパン屋を経営されている岩佐さんは、鳥取での生活は２回目である。もともと、チェーン店のパン屋に勤務されており、チェーン店の鳥取進出と同時に移住されたのが１回目。その後に転勤となり、９年前にパン屋「一心庵」の開店と同時に再び鳥取へ移住することとなった。鹿野町を選んだ理由は偶然だったそうである。古い建物を活用して鳥取城近くで開こうと考えていたが、過去に城周辺で火事や地震が起こったために、古い建物が残っていなかった。そして鳥取市の職員に紹介されたのが、現在の場所である。移住経験の多い岩佐さんは鳥取での生活の特徴について、良いところも悪いところも人との関係が深いことだという。鳥取ではマンションで生活することもあったが、鹿野での生活とマンションとの生活は大きく異なる。鹿野では近所付き合いが深い。たとえば、町内会の会合や公民館でのイベントなどはほとんどの町民が参加するものである。これらは都会ではけっして味わうことのできない経験である。最初は不慣れだったが、鹿野の風習には徐々に慣れていった。現在の仕事は会社勤めではないため、自由に生活ができて満足しているともおっしゃっていた。

鳥取にこだわって移住したわけではなく、いい条件の場所がたまたま鳥取だったこと、もし子育て中であれば鹿野には高校がないため移住には慎重になっただろうこと、鳥取だけにある魅力というのは一概に言えないと話してくださった。

3−6．佐古肇さん：７月12日、中海テレビ放送（鳥取県米子市）にてインタビュー

佐古さんは滋賀県出身で、現在は株式会社中海テレビ放送（鳥取県西部のケーブルテレビ局）に勤務されている。きっかけは佐古さんのパートナーが境港の出身だったことだ。スポーツやレジャーが好きなこともあって、たびたび訪れており、海や山が近くにあっていいなと感じていた。鳥取へ移住することを決めた一番の理由は、子どもたちとすれ違いの多い生活をしていたある日、仕事に出かけるとき子どもたちに「いってらっしゃい」ではなく、「また来てね」と言われ衝撃を受けたことである。そして転職しようと思い始め、境港出身のパートナーの実家に近く、子育てもしやすい環境を考えて鳥取に移住することを決めた。車の交通量などを関西と比較すると子どもは安全に遊ぶことができるし、自然が豊かで子どもたちと一緒に楽しく遊べるのも魅力である。鳥取は子どもや保護者にやさしい地域だと感じる。鳥取県は過疎地域と言われるが、佐古さん自身はそのように感じていない。小学校も極端に離れていると感じることもないし、中学校も自転車で通える範囲で、高校では汽車などがあるため、今暮らす中では過疎を感じることはない。また、佐古さんはスポーツやレジャーが好きなこともあって、鳥取には魅力を感じている。たとえば、大山に子どもを連れてスキーに行くことができたり、「がいな祭」をはじめとするお祭りや、子どもたち対象のイベントなども定期的に開かれている。

会社の同僚にも関西や九州からの移住者がいる。中海テレビは鳥取大学とも交流があり、就職情報の支援を行っているそうだ。鳥取大学の県内就職を増やすという

意向に賛同し、連携している。また、「挑戦」をキーワードに電気の販売や格安スマホサービスも実施しており、なるべく地元企業が提供しているサービスを消費してもらって、地域内で経済を循環させることにも取り組んでいる。地域密着型の会社で、多くの分野に挑むことができ、楽しく勤務しているそうだ。

4．追加インタビュー

4−1．徳本敦子さん、河上啓子さん

11月15日、「森のようちえん・風りんりん」を運営されている徳本敦子さんと河上啓子さんに大学へ来ていただき、追加インタビューを行った。お二人はそれぞれ風りんりんの代表取締役、および副代表取締役である。インタビューの中では、風りんりんの概要や設立までの経緯、そして徳本さんと河上さんの人生や考え方など広い範囲について伺い、よりミクロな視点から行うことにした。

まず、徳本さんと河上さんのプロフィールを簡単に紹介しよう。徳本さんは神奈川県出身。もともと東京で音楽関係の仕事をしており、その際にパートナーと出会い、結婚。パートナーの希望で農業をするために鳥取に移住し、2014年4月に「風りんりん」を開設した。

徳本敦子さん
（風りんりんホームページより）

河上さんは鳥取生まれ、鳥取育ち、子どもの頃はわんぱくでいたずらっこだったという。21歳で結婚し、出産後にさまざまな仕事を経験している。ヤクルトレディをしていた頃に徳本さんに誘われて「風りんりん」のスタッフになった。

河上啓子さん
（風りんりんホームページより）

4−1−1．森のようちえんについて

森のようちえん・風りんりんでは、「育てる」ではなく「育つ力を見守る」保育を心がけている。子育てとは、「子どもが興味を持つこと、集中しているところを邪魔しない」ことという考えがあり、「ダメ、汚い、危ない、早く」をなるべく言わないことをモットーにしている。主な活動場所は、自然豊かな安蔵森林公園（鳥取市河内）やとっとり出合いの森（鳥取市桂見）、青島公園（鳥取市高住）などである。一般的な幼稚園とは違った活動をしていて、子どもたちが実際に川や山に入って遊んだり、火や包丁を使って料理したり、鳥取ならではの雪で遊ぶ日もあるそうだ。いろいろな体験を通して、身体で覚えてほしいという考えが根底にある。もちろん、安全を第一に考えているため、子どもが行くところへは絶対にスタッフが付き添い、本当に危ないと思ったときだけ注意するという。実際の活動の様子を映像で見せていただいたところ、「ダメ」など大人が口出しするようなことはなく、子どものやりたいことを優先していることがわかった。ケンカが始まってもスタッフが仲裁することはなく、自分たちで解決させようとしていた。ケンカをしたときの痛み（精神面も含めて）を知ってほしいと考えておられるそうだ。また、風りんりんのスタッフは子どもをほめることもしないという。ほめることは一般的にはよいことだと考えられがちだが、半面、大人にほめられることを期待して行動する子どもになってしまうため、過度にほめることはしないのだという。

このような見守り保育をしていると、大人が何も言わないことで、子どもがあらゆることを自分で考えるようになり、また相手のことを理解するようになるそうだ。なぜそれをしてはいけないのかを、自分で理解し行動しているため、社会性を育てることができる。子どもは、大人が思っている以上にしてはいけないことを理解しており、実際にしてはいけないことをする場面はほとんどないという。たとえば、ケンカ中に石を拾って相手を殴ろうとする動きはするものの、脅すだけで終わるらしい。

このような教育方針の幼稚園に対して保護者側からの意見はどうなのかを質問すると、最初の頃は見守り保育

自然の中で遊ぶ子どもたち
（風りんりんホームページより）

週１回のクッキングではマッチ、新聞、薪などで火をおこす
（風りんりんホームページより）

背浮きを学ぶ子どもたち
（風りんりんホームページより）

雪で遊ぶ子どもたち
（風りんりんホームページより）

を不安に思っていた保護者も実際にはいたそうだ。しかし現在は、風りんりんの教育方針に興味をもつ人々は増え、説明会にくる保護者も年々増加しているという。

4−1−2．開設までの経緯

風りんりん開設に至った経緯についてのお話の中では、徳本敦子さんの生きることへの考え方をうかがい知ることができる。神奈川県出身の徳本さんが移住してきた理由は幼稚園を開設するためではなく、パートナーの「農業をしたい」という希望がきっかけだった。鳥取に移住してしばらく経った頃、パートナーから智頭町にある「森のようちえん　まるたんぼう」を見学することを勧められ、子どもを連れて行った徳本さんは一般的な幼稚園と森のようちえんとの違いに大きな衝撃を受けたという。つまり、森のようちえんは自然の中でのびのび遊ぶことを重視しているため、雨の日でも外に行って遊ぶなど、子どもたちの自主性を育むことを目的としている。このような特徴があるため、見学に行く前の徳本さんは「子どもを過酷な環境に置けない」と消極的だったそうだが、試しに参加した当時３歳で甘えん坊で泣き虫だった長男が泥だらけになりながら遊んでいる様子を見て、子どもは自然の中で遊ぶのが好きなのだったと思い出し、森のようちえんに通わせた。しかし距離があり、かつ当時は市内に毎日森へ行く森のようちえんがなかったため、自分で設立しようと考えて行動し、「NPO法人鳥取・森のようちえん・風りんりん」を2014年４月に設立することになった。

設立するにあたり、手助けが必要になり、いろんな人に声をかけた結果、河上さんが風りんりんのスタッフになった。河上さんは、自分で新しいことを始めようという考えはなかったそうだが、徳本さんから話を聞いて自分も風りんりん設立に携わりたいと思い、協力することを決めたそうだ。

4−1−3．徳本さん・河上さんの〝Life〟

徳本さんと河上さんのお話を伺っていると、２人が人生で大事にしていることはたくさんあり、それらが風りんりん設立に関係しているのではないかと考えた。そして、このような人々の生活の仕方や生きるうえでの考え方、そこから得られる学びなどを、人々の〝Life〟としてまとめ、まちづくりへの関わり方をみていこう。

まずは、徳本さんのLifeについてまとめていく。徳本さんは「何事も楽しんでやるのがいい、楽しんでやるのが大事」とおっしゃっていた。やりたいことをやるのは楽しむことにつながり、大変なことがあっても苦労にならないという。そのため、普通なら辛い・苦しいと感じるような状況でも乗り越えることができ、風りんりん設立においても、大変な中にも楽しさを感じながらの日々だったという。またもう一つの取り上げるべきLifeは「自分をどういう状況に置くかは自分次第」とおっしゃっていたことである。この言葉の意味は、自分のがんばりや行動によって環境なども変わってくるため、楽しみながら生きるためには自分の力で動くことが大切だということである。これは、森のようちえんが自宅近くになかったために自身の手でつくろうという発想になっ

たことにもつながる考え方である。また、徳本さんの座右の銘は「本当に大切なものはほんの少ししかない」という言葉だ。大事なものをすべて拾い上げていると身動きがとれなくなってしまう。もともと自身も優柔不断だったと話す徳本さんは、今は何が大事かを常に考えて行動するようにしているとおっしゃっていた。

次に、河上さんのLifeについてまとめていく。「失敗はその人にとって必要」だという河上さんは、失敗することによって痛みのわかる人間になれると考えておられる。また、「とにかくいろんなことをしてやりたいことを見つければいい、そこでやめたくない仕事に出会える」ともおっしゃっていた。河上さんは風りんりんで働く前にさまざまな仕事をされていたが、こういう考えがあったからこそ仕事を転々とすることもプラスに捉え、風りんりんで自分のやりたいことを見つけられたのだろう。座右の銘として「前向きにもがき苦しむ経験は、すぐに結果に結びつかなくても、必ず自分の生きる力になっていく」という言葉を挙げていた。過去にいろいろな困難もあったけれど、周囲の人に助けられることも多かった。これまでの経験が現在に活きているし、失敗の大切さという考え方にもつながっていると話されていた。

4−1−4．徳本さんと河上さんのインタビューの考察

風りんりんのお二人に行ったインタビューの内容と、事前に輪読した文献とを比較し、考察した結果を以下にまとめる。

まず、文献における「風の人」「土の人」とインタビュー内容とを照らし合わせたところ、徳本さんが外部から来て地域に変化をもたらす「風の人」、河上さんが土地に根づいて受け継いでいく「土の人」ということができ、文献で示されていた構造に非常に近いと考えられ、それをまとめたのが表１である。

一方で、異なる面もみられた。文献では「風の人」は県外出身者を中心に取り上げていたが、必ずしも明確な意思をもって県外から移住した人だけが「風の人」になる条件ではなかったのである。徳本さんが鳥取へ移住後に智頭町を参考にして鳥取市内に森のようちえんをつくったように、同じ県の中でも小さな地域同士で「風の人」と「土の人」との交流がまちづくりにつながるケースがあると言えるだろう。

4−2．中村恭子さん

中村恭子さんは現在、鳥取県中部の琴浦町在住、グラフィックデザイナーとして働いておられる。パートナーは農業に携わっており、その手伝いもされている。

中村さんの移住は「Wターン」と言われるもので、故郷とは違うところへ移住し、再び故郷に戻るVターンを２回繰り返すことを指す。中村さんは、鳥取から東京、鳥取、東京、鳥取へと移住された経験がある。

鳥取県琴浦町で生まれ育ち、倉吉市の高校を卒業後、東京の美術大学（絵画科）へ進学し４年間で卒業された。当時は就職氷河期で、どこかの企業に就職したいという思いもあまりなかったためにフリーターになった。そして、パソコンのスキルを身につける必要があるだろうと考えて、広告会社でアルバイトとして働くことにした。そうしているうちに実家の事情で鳥取へ戻ることになった。鳥取でしばらく過ごしたものの、周囲の目を気にせず自由に活動できる都会のほうが自分には合っていると感じ、再び東京へ戻った。雑誌の編集業務などに携わり26歳から約８年間は広告会社で正社員として勤務した。現地へ撮影に行ったり、製品づくりにも携わるなど幅広い仕事を経験された。そうしているうちに、パートナー

表１：文献での「風の人」「土の人」の特徴と徳本さん・河上さん

文献での「風の人」の特徴	・やろうと思ったことをする ・フットワークが軽い ・自分の感情に従い素直である
徳本さん	・やりたいことをするときは苦労を感じない ・楽しんでやることが大切 ・自分の感じることを大切にする
文献での「土の人」の特徴	・新しいことに消極的であるが、実行する際に強いエネルギーをもっている
河上さん	・自分ではしようと思わなかったが、徳本さんに共感して協力しようと思った

が農業に携わりたいと考えるようになり、農業ができる場所への移住を検討することになった。最初は福島県や北関東あたりを考えていたが、東日本大震災が起こってしまったため、福島や北関東への移住は考え直すことになった。パートナーの出身地である愛知県も考えたが、地価が高いだろうという理由で断念。移住希望者の人気が高い岡山県も候補として考えているうちに、すぐ北にある鳥取県なら土地勘もあるということで最終的に鳥取県への移住を決めた。

結果として故郷の鳥取での生活が三度目となった中村さんだが、強い意志や愛着より「流れ」にまかせて定住となった今、地方と都会は大きく変わらないのではと考えるに至ったそうである。また、鳥取は東京と比較すると、良いところだけでなく悪いところもあるという。たとえば近所づきあいなど、人との距離感の近さを地方ならではの良いところだと捉える人もいるが、逆にプライベートに過度に干渉されていると感じるときもあるそうだ。

仕事に対しては、グラフィックデザイナーという職業に固執しているわけではないという。ただし、お話を伺っていると中村さんの仕事は、一般的に考えられるグラフィックデザインの仕事とは異なっていた。中村さんは東京で広告会社の制作部に勤務していた頃、クライアントから依頼された仕事を分析・検討し、可能な場合は細分化して、それぞれ適任と思われるデザイナーに割り振る業務を担当されていた。つまり、クライアントが何を目的に依頼してきたのか、その目的をどのように具現化するのかなど、コンサルティングを行うことが仕事を進めていく上では不可欠であり、自分自身は「問題解決が得意だ」とおっしゃっていた。

鳥取に戻ってからも、グラフィックデザイナーという肩書で仕事をされているが、一般的にイメージされるデザインだけではなく、以前と同じようなコンサルティングから始めるという。目的や方法が不明瞭なまま中村さんに仕事を依頼してくるクライアントが多く、ときには厳しいことを言う場合もあるそうだが、問題解決のためにまず相手にも問題を認識してもらい、そこから一緒に考えていくというスタイルで仕事をされている。

次にインタビューの中で発見した、中村さんの仕事とまちづくりとの関わりについて紹介しよう。

中村さんは「風の人」「土の人」のどちらに当てはまるのだろうか。中村さん自身は、「地域を変えたいというような強い意志を持っているわけではない」とおっしゃっていた。しかし、鳥取県にこれまであまり存在しなかった、コンサルティングから始まるデザインという仕事をしておられる。このように、その地域に今まで存在しなかったものを取り入れ、活動する姿は、地域に新しいものをもたらす「風の人」と言えるのではないだろうか。また、中村さんは琴浦町の移住アドバイザーとしても活動されている。これは琴浦町民役場から依頼されたもので、鳥取県または琴浦町への移住を考えている人々への講演会を行うというものだ。移住してからの生活状況など自身の体験をふまえ、移住を検討している人々が気になっていることを率直かつ具体的に話しているそうだ。

中村さんが作成したパンフレットやフライヤー

インタビューの中で中村さんに、ご自身は「風の人」と「土の人」のどちらだと思うかを質問した。それに対する答えは「自分はどちらにも当てはまらない。感覚的には土の人になる素質があると思う。移住者ではあるが地域の人々を啓蒙するつもりはないので、風の人ではないと思う」というものであった。このような中村さんの考えからは、「風の人」というよりむしろ「土の人」ではないかとも思える。しかし、これまでの中村さんの生い立ちや仕事に対しての取り組み、移住してからの生活の様子などを伺っていると、中村さんは地域に新しいものをもたらす「風の人」だとも考えられる。

文献で示されている「風の人」と「土の人」の役割として、「土の人」はその地域に根づき、地域を支え育んでいくような土台的存在である。「風の人」は地域の外から、地域にとって新しいものや理想的なものを運んできて、地域を動かすもとになる存在だが、同じところにとどまっていないし、地域の外部へも発信する。中村さんにはどちらにも当てはまる部分があると言えるし、どちらにも当てはまらない部分があるとも言える。「風の人」や「土の人」に当てはまらないということは、他の言葉「○○の人」と言い表せるのではないかとまちづくり班でもさまざまな意見が出てきた。

その結果、私たちはインタビューから、中村さんは「風の人」と「土の人」両方を担える存在の人であると考察した。現在の仕事の面でも、鳥取に新しいものをも

たらしたことから「風の人」の要素があり、町内会の活動にも取り組んで地域コミュニティに参加していることから「土の人」の要素があると言えるだろう。このように、地域活動において、その地域に住む人々の中には「風の人」や「土の人」のどちらかに分類されず、両方を担える人もいるのだと認識した。

5．おわりに

今回、私たちは移住者の方々が鳥取で暮らす工夫や楽しみ方と、地域との関わり方を知ることを目的とし、その際の観点を一人ひとりの暮らし方と、移住者の地域に対する考え方の２つに設定し調査を進めてきた。今回の調査では題名を「Life」としたように、インタビューによって移住者の方々の地域や生き方への考えを学び、また輪読した本と調査結果の比較を通して、地域に住む人々の関係性の構造について自分たちで深く考えることができた。

移住者の方々へのインタビュー調査を行った結果として、現実における「風の人」と「土の人」の関係性の構造は文献で示された定義と必ずしも一致しないことが明らかになった。インタビューを行う前は、風の人は「まちを変えてやろう！」という意志をもって地域に移住し、その意志がまちづくりに直接つながっているのだと思っていた。しかし実際にインタビューをしてみると、移住者の方々が個々に「興味のあること」「やりたいこと・やらなくてはいけないこと」によって起こされる行動がまちづくりにつながっていることがわかった。今回の調査の前半、私たちは「なぜ鳥取に移住したのか」と鳥取という場所にこだわってしまっていたが、インタビューを進めるにつれてまちづくりや有意義な生活を送るために必要なのは意志をもって行動すること、つまり「どこに住むか」ではなく「何をするか」が重要なのだと気づかされた。

今回、インタビュー調査を経験したことによって人に会うことの大切さと必要性を学ぶことができた。また、文献調査を行っていたことによってまちづくりに関する基礎知識を身につけてインタビューを行うことができ、さらに実際の調査結果と文献の定義について自分たちで深く考察することができた。これらの経験やインタビューで伺ったお話は、自分たちのこれからの人生や生活を考える上で大きなヒントとなった。

最後に、今回の調査の際にご協力いただいた多くの方々に、ここでお礼を申し上げることによって報告の締めくくりとしたい。ご協力いただき、本当にありがとうございました。

【ご協力いただいた方々】

今井康誠さん、今家邦雄さん・美恵子さん、岩佐正敏さん、河上啓子さん、喜瀬雅彦さん・紀代美さん、佐古肇さん、徳本敦子さん、中村恭子さん、森哲也さん

【参考文献・Webサイト】

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美（2016）『質的社会調査の方法：他者の合理性の理解社会学』有斐閣

田中輝美・法政大学社会学部メディア社会学科藤代裕之研究室（2015）『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』ハーベスト出版

山崎亮（2015）『ふるさとを元気にする仕事』ちくまプリマー新書

風りんりんホームページ　https://furinrin.com/（2020年１月24日閲覧）